

優秀賞

私の役目

青森県弘前市立津軽中学校

三年 白取 苑 來

私は生まれつき耳の聞こえが悪い。先天性難聴なのである。そのため一歳の時から両耳に補聴器をつけている。これをつけていないと、耳のそばで飛行機のジェット機の音がやつと聞こえるくらいなのだ。今は、補聴器をつけているおかげで友達ちやいろいな人と会話ができている。そして、これまでたくさんのお話を学んできた。

私は小さい時からろう学校でずっと言葉の訓練を受けてきた。ろう学校では、手話を覚えることもすすめられた。しかし、母はそれを断った。なぜなら、社会にでてから、手話ができる人は少ないからだ。そこで、耳でしっかりと聞くこと、口の動きを読みとる力をつけてほしいと願った。

五歳の時、私は、母にピアノを習いたいと言った。母は難聴の子がピアノを習えないかと、何軒ものピアノ教室をまわり、たのみに行ったそうだ。教えてくれる先生がみつかるまで、何人もの先生に断られたらしい。やつのことでもみつけた先生のもと、今も私はピアノを習い続けている。合唱コンクールの伴奏ができるまでになった。

他にも、私は小さい頃からずっと、「弘前ねぶた祭り」に参加している。「ねぶた祭り」で「鐘」を

鳴らしたいと母に言ったら、母は鐘を私に買ってくれた。私はその鐘を毎年「ねぶた祭り」でたたいて鳴らしている。

このように、母は私がやりたいと言ったことが実現できるような力を尽くしてくれる。母は私が耳が聞こえないことで、できないとあきらめることをひどく嫌う。しかし、私は、できないことをすべて耳のせいにしてしまいう時がある。そうすると、母は鬼のように私のことをしかる。

「あなたは、耳が聞こえないだけでしょ。目は見えるでしょ。手や足は動くでしょ。目の見えない人、手足の動かない人たちの大変さをわかりなさい。」と。

これが母の口ぐせだ。この言葉を聞いたたび、私は「そうだな。」と思い、自分の心をふるい立たせている。そのたびに私は、できないことを耳のせいにする。何でもチャレンジしようと思いたすのだ。

ただ、私の難聴は進行性のものだ。毎年、耳の聞こえが少しずつ悪くなっている。先日、病院に行った時、「このまま聞こえが悪くなり、補聴器で音が聞きとれなくなりそうです。その場合、人工内耳も考えなければならぬよ。」と先生に言われた。私はこのことを聞いて、とてもこわくなった。これ以上聞こえなくなるといふことを想像したらこわくなった。そして、これからどうなるのだろうと、とても不安になった。

私は今まで、いろいろなことに挑戦してきた。他人からみたら、何でもないようなことでも、人一倍時間をかけてやり、できるようになったことがたくさんある。耳が聞こえなくなるのはとてもこわいが、何でもあきらめなければ、何とかなるような気がする。あきらめずがんばることはとても難しいことだが、今までのことを考えると、ちっとも難しく

はない。他の人から見ると、耳が聞こえない、コミュニケーションがとりづらいのはかなりつらくみえるかもしれない。しかし、私は、耳が聞こえないからこそ、他の人の言葉を一生懸命聞きとろうとしている。私はひとつひとつの言葉、会話を聞きのがさないように大事に聞いているのだ。友だちとのコミュニケーションは、私は会話からはじまると思っている。私は人より耳が聞こえない体で生まれてきたからこそ、これからも友だちとの会話を大事にしていきたいと考えている。みんなは普通に耳が聞こえるために大事な話を聞き流してしまいがちだ。こういう時、私は、会話の大切さ、言葉の大切さを友だちに気づいてほしいと思っている。私の役目はこれだ！ 難聴者だからこそ気づく大事なことをみんなに伝えること。

耳が聞こえないからこそ気づけることがある。そのことをみんなに伝え、そして、これからもみんなとともに生きる。これが私の役目だ。

私は補聴器をつけていれば皆の声が聞こえ、はずすと何も聞こえません。そういう私だからこそ健聴者、難聴者の架け橋になればと思います、この作文を書きました。これからは、誰でも過ごしやすい環境になってほしいと思っています。

作文を書くに当たって